ほんとうのこと

棟方志功

これは、お茶の水女子大学　家政学部　児童学科で、一九七三年　十二月一日になされた講演のテープを文字にしたものである。くり返しや、間投詞も多いが、できるだけ、語られた通りに記録してある。行を追って、ゆっくりと読んで頂けると、迫力が伝わると思う。

（津守記）

＊　＊　＊

（棟方先生　登場）

（黒板に絵をかきながら）ウーン、こないだね、あの、ぼく、北海道いったんですね。北海道、あの、北大……北大ですか。あそこには、ポプラの並木が、いいのあってね。油絵、あのー、かきたいと思っていったーですね。前に行った時よりも、時間の関係、時の関係が、とても、この、ひさんな感じだったんだもんね。ポプラが。とてもよかった、でしたね。そこまで行ったら、もっと、ひさんな所を見たいと思いましてね。さあ、北海道のひさんだっていうところ、どこだっていったら、そら、こーよね。ああ、それは、あのー、網走に行くがいいって。（笑い）おまえいってきたんかって言ったら、ないって。ぜったい、こんご、あそこは、あまり

いいことした人は入ってないんだよ。ハッハ。悪いことしなけりゃダメだよ。そうだって。じゃあ、ぼくなら、だいじょうぶだって、ボクね、悪いことばかりしてきたんだから、もう、ハッ。キップいらないやって。そういって、まあ、いったね。そして、ほんと好きだった。所長がドーゾっていうんだ。（笑い）まけたよ。ハハ。

なんも、ぼく、さびしくないんだ。（笑い）ひまわりが咲いていてね、その下の所に、ボク、好きなんだ、サンフラワーっていうのは。（笑い）ひまわりもとても良かったんだー。ひまわりって……（黒板にかく）あの、中川さん、よくかいていたけどね、あのー、ひまわりっていうの好きなの。とても好きなの、ボクは。そのー、なにかしら、ボクの心を惹くんだからなあ。字より絵の方が（笑い）早いんだね。ハハ、ボクね。ひまわりっていうね、字っていったら、ボクね。ひまわりっていうね、字っていったら、ボク、いつもかけないんだー。よくまちがえるんだ。ひまわりっていうの、こ、こ、こうですかー？　こうかいて、こう、こうかな？　（向日葵とかく）こうかくのかな？　わかんないね。どっちかわかんないけど、まあいいんだ。こんなもの、まちがったってね、ハハ。

山下清さんっていう、あのー、絵をかく方ありました。死にましたね。よく、あの、兵隊さんのこと好きで、大佐だとか、大尉、曹長、みんな覚えているの。

よく、あの、花火の絵が、とても上手でしたね。本当に、あの、花火の花、ホッ、あの、花火の、あのピカって光るひとつまで、みんなかくんだから。全部かくんだから。アーアー、アー、今度かいたの、一つ、あの、火が足りないって言ったそうだから。（笑い）ねえ。

そんな人が、ある時、宿屋へ、とま、泊りましたらね、そこの女中さんがね、「あの、先生、あの、先生は、お湯がね、あの、あったかいお湯、いいでしょうか。あの、ぬるい方が好きですか」っていったらね、「ちょうどいいのが、いいよって」いった。（笑い）まいったね。

ハハ、実際、ちょうどいいのが、いいですね。なかなか、そういえないものですよー。これはね、ちょうどいいのが、なかなかいえないですね。ウン。ちょうどいいっていうことは、一番いいことなんだけども、なかなか、思い切って、ちょうどいいっていうことは、言い切れないものです。それを、何気なくね。サラリとね。風流を味わうように、ねえ、ちょうどいいって言ったって、ねえー。

あの方は、知能的になにがしかということを言われた。それで、その、ある一点においては、ですね。もう、絶大な、立派さをもって、自分の一生をはっきりと生き尽くした、偉い人でありますね。こういう、絶妙な技巧をね、もてる人、もつ人、なんていうのは、ちょっと珍しいですねー。

でねー、あの、くり返しの話になりますけれど。ボクいったのは、その、網走の、あの、くどいようですが、あれは、あの、網走の刑務所ですよね。いったら、所長がむかえに出て、ドーゾっていうんですよ。(笑い)、ドーゾっていう(笑い)。ドーゾっていうんですよね。それでね、偉い人が、二人、三人ぐらいいてね、こんなにボク、ここへ歓迎されるかしらって、(笑い)へへ、言ったんですよ。やっ、だいじょうぶです、だいじょうぶですって。そしてね、まあ、迎えられていってね、よもやまの話して、やあー、土屋クンはね、ねえ、あの、ここへきたっていうからきたんですって。やあ、ボクも網走っていうところは、まだ、北海道は、そうですねー、仕事、きたけれど、まだ、網走までは来たことないから、今日はね、網走来たいってね、札幌から、まっすぐ来ましたって、外で挨拶しましてね。そして、そう、札幌で、海が見たいって、札幌じゃない、オホ、オホーツク海、を、見たいっていいましたら、いくらでも、ありますから、見てくれって。(笑い)話がいいよね。いくらでも、ありますから。いくらでも、ありますからみてくれって、ハハ、本当にね、本当にね、なんだー、ボウシ岩っていう岩がありましてね。(黒板にかく)

あの、これねえ、あのねー、あのー、オホーツク海だというんですよ。氷がねえ、もうあるんじゃない? 氷がねー。こんなに、岩があるのよ。こんな岩だったなー。ウーン、こういう岩、一つありました。とても、まあ、いい、あのー、景色でありました。ボク好き。筆……持っていきましてね、かいてきましたが。

そして、こんど、そこで、色々、景色みて、かいて、刑務所に、また、入所しましてね、(笑い)、今度、又、お茶をのんで、あのー、いろいろ話して、そしたらね、あの帰り、「どうもおじゃましました」っていったら、「またドウゾいらっしゃい」って(笑い)言われましてね、よく見ました。

見たいって思うものね、見るっていうことはね、さっぱりするね。なにか、こう、借金したものをね、パッとね、こう

払った、払ったような気がして、いいものですよ。ウン、なんだかねー、あのー、見たいとか、聴きたいとか、思うことが果せない時は、なにか、重苦しいよね、背中全体がね、なんだか重い。責めているようで、冷たい汗があるようで、汗ばんで、イヤなもんだ。さっぱりしましたな。

そして、今度、えー、ここ出たらね、あのー赤レンガですよ、ああいうところはね、みんな。赤レンガで、またー、この色がいいんだ。赤レンガの色がね。なんともいえない、きれいな色。きれいったって、ねえ、色だから、まっかできれいとか、いうわけじゃないの。もうー、そのー、そうだなあー、妙な色なんだ。フフンフフフ……。

妙なんていう言葉ね、不思議じゃないですか妙だって。あの人は妙な人だなとか、妙な女の人だよとか、妙なこというんだとかって。人間っていうものね、……にできているんだよ。わからないことになると、妙だとかっていいますね。不思議だよ、ね。妙なんて。妙なんだとかいうのは、おもしろい言葉だと思う。

で、日本人だけかな？　ヨーロッパあたりにもあるかな？妙っていうこと。ねえ、私は、しらないけれども。また、それに、妙だっていうの、日本じゃ、妙だとか、雅だとかいいます。雅は、わかりますよねえ。みやびやかっていう字じゃないですか、あの雅・雅っていうの、この字でしょ（と黒板にかく）……とか、しぶいとかね。もうちょっとーちょっとこうー、そういうようなことばに、粋っていうような言葉、なあ、粋っていうことば、あります。ーね、粋人とかね。本当に粋なっていうか。それから、あのー、もっともっと変だと、風流な人だとかっていうことば、の人がありますよ。あれは、風流人だと。風流、なんていうことば、たいへんですよ。もう、最高でしょうな。あらゆる人間の感情、を、こうー、きらめくようにね、生かして、それを、もう一歩ね、なんとも言えない、このーまあ、芭蕉のことばでいえば、「……にあずかった」思い、を、何気なく、さりげなく、こうーね、サバサバってね、流していけるような、風情、ですかね、なさけ、っていうか、情っていうか、ねぇ。情とかなさけっていえば、なにか、しめっぽくてね、涙っぽくて、めめしいけども、風流っていうのは、それを、そういうことはない。なんともいえない、こう、まあ、こうね、結城の着物を十年くらい着て、それを、洗たく、なん回か、なん回かして、そして、こう、着せるような感じじゃないでしょうか、ねえ。別に光りもしない、ねえ。また、木綿のように、ゴツ

ゴツもしない。こう、何かとつとつとした中に、何ともいえない。この、……光と、おだやかな世界を、あの一枚のきものの中に含ましているっていうのは、やっぱり、結城なんていうのは、それを思うには勇気がいりますよね。（笑い）フフ、本当。ハハ。

まあ、そういう世界、ああいう世界が、粋とかいうんじゃ、ないでしょうか。ねえ。

女の世界を表わすのも、粋とか、あでとかね、雅とか、あるでしょうね。いろいろに、そのー、そういう、この一気持ちの高いとか、低いとか、っていう、高低、に、関係のない、この……世界っていうのは、非常に大事な世界ですね。

これが、やはり、まあ、いいたくないことばだけど、美っていう、ものとか、もう一歩いいたくない、芸術なんていうことばありますが、そういう世界と……言えるんじゃないですかね。

風流って、やっぱり、いいですなあ。

もう、やっぱり、人間の、思いっていう、ものを、このー、知らずしらずにね、不識なうちに、……していく、一番きれいな世界っていうのは、風流じゃないでしょうか。そういう思いの中に、この、身をつつませ、思いを募らせ、自分のかいていったものをですね、その中に、このー、そうねー、遊ばせる、っていうこと、でしょうな。これが、大事、へへへ、で、ですね。ハア。

まあ、ものというものはねえ、どう考えたってね、考え、つかない、穴があるんですよ。穴がね。その、考え、考えの、めっぽうな、中にある、穴こそ、やっぱり、非常に大事なこと、なんですね。

仕事、なんていうのは、そういう、もんでしょ。

まあ、私は、前に、そういうこと、云ったかもしれませんけれども、事につかえるということが、仕事ですからね。事をしている、のが、仕事じゃないですよ。やっぱり、仕えるっていうことが大事ですね。

大事っていうことも、大事なんだー。ハハ。大事っていうこと、言います。大切なんていうことはいいますね。大切なんて、なんのことだかわからない、ぼくも。大事は、ほら、大きくかくっていうか、なんか、ほら、こうーねえしますけど、大切なんていうことば、わかりませんよ、ぼくだって。ぼくだって、じゃ、ぼくだって、ぼく偉いようだけど、（笑

い）そうじゃないんだ。そりゃまちがい、ぼくの。不徳の……。（笑い）

大切っていうことば、ぼく、いいねー。なんだか、わからないけどいいんだ。これ、わかってしまえばよくない。

さっきも、ちょっと、あの、あそこの、控えの部屋で、お茶、の話をちょっとしたんだー田口先生と。あの、大切なっていう気持ちをね、形であらわしたのが、やっぱりお茶でしょ。ああいう、初めからねえ、終わりまでの、約、懐石を入れて、二時間半位の、時間の、尊い時間。呼吸の、がっちり、した、挙動の美、っていうあり方の世界、っていうもの。非常にこう大切な、っていうことなんですよ。

大切っていう字は、大きいっていう字に、切るって書くんですよね。（と黒板にかく）切る。なんだかわからない、切るっていうのは。けれどもね、切れが大切だっていうこと言いますよ。よくいいます。切れが大切だっていうこと。そういうこと、だと思うんだね。きれがよくないっていうこと、切れをよくすること、切れを、本当に、立派にすること、が、大切っていう意味、じゃなかろうかと、私の足りないお目から、そう、まあね、判断しているわけですが、そういう大切さ、こと、切れ、切れのいいこと、なんのことでも、そういうことが、あるでしょう。くどいようなことでもね、たまるようなことでも、あふれるようなことでもね、それを、切れがよくすること、が、大切なんて、なんのことでも、そうでしょ。ねえ、料理だって、そうでしょ。切れが良くないと、いい味、なりませんねー。

酒の味をしるときは、飲んでしまわないそうですね、きき酒っていうのは。何百本もある酒を、わかるんだって、その道の人は。ダメ、へへ、前にでてるの、あれ、全部のんじまったらだめなんだって、ね。ぼくの妻、きいてね、（笑い）「それじゃ、二～三本のんで酔っぱらっちまいますよ」（笑い）きき酒でー、おもしろいね。のどに入れてきくんだから。ウウン、香なんていうのも、そうでしょ。鼻で、かんでて、きく、なんていうことというでしょ。味をーきく、香をきく、ね。

お茶を飲む、じゃなくて、お茶を喫するとかいいますけど。それが、結局、大切なことを、一番意味するんですね。苦くなっちゃっちゃもうだめなんだね。やっぱり、そのー、舌でもって、ほおをこがすような味、でないと、茶がうまくない。せん茶、玉露などね。それを、パッと切るところに、この、味の醍醐味があるんじゃないでしょうか。ですから、こ

の、切るっていうことは、非常に大切……。

この、こないだボクは、油絵をみせた会、ありました。そしたら、ある人が、「棟方の油絵は、筆を二度使っていないな」っていうんですよ。とってもよく当ったことばなんです。ボク、二度筆使わないんですよ。

いっかい、油絵というものは、ヨーロッパから勉強した手法はね、二度つけても、三度つけても、いいんですよ。なすって、なすって、なすって、形を把握するんですもの、なあ。これ、ヨーロッパのゆき方、技法ね。

セザ、セザンヌが、りんごの丸さまで、これ話だろうけど、りんごの丸さまで、絵の具盛ったっていう話、ありますね。セザンヌが。

けれども私、日本のね、油絵、やっぱり油絵だってね、やっぱり西洋から来た油絵の手法と、日本から生まれてくる油絵の手法と、ちがうと思います。私はね。私はやっぱり、油絵、日本画なんですよ、結局ね。日本から生まれたもんですから。油絵、でも、日本画なんですよ、材料が違うだけですね。

で、どうも、あの、ぼくは、絵かいていると、この、パパーッですね。パパだからパパっていうのかな？　（笑い）パパッてこうかく、あの、切れがね、あの、なんともいえないんですよね。本当に何ともいえない感じ。色っぽい、驚ろき、なんですね。切れがいい、大切、なるほど、大切っていうことばの、そのいみあいがね、仕事してると、わかってきます。事に仕えていると、わかる。事に仕えないと、それが、こないです、やっぱりねー。本当に、その大切っていうことは、実に、大切なことですね。何でもないことですよねー。

切るっていう、これぐらい大切なことはないよ、日本のことばの中で。これを、あれではどういうこと言っていますかな？　皆さん勉強している方ばっかりだから、おわかりでしょうけど、いわゆる辞書とかああいうものではね、どうかいているかな？　大切ってね。ぼくまだ読んでないからね。あの、辞書を持ってないわけでないけど、見てないんだ。

大いに切るっていうんだ。大切っていうことに、こだわっているわけでないけど、やっぱりこだわりたくなるよね。ウン。これに、こだわらなくなればいいんだ。本物なんだ。本物になれないところで、ボクがあって、本物でないところに

棟方がいて、本物でないところに棟方志功があるってことだな。へへ、本物に、実際ね。

こないだね、あのー東大寺、行ってきました。あのー、東大寺、行きましてね、あそこの管長は、上司海雲っていう方、いい方でしたな、とても、いい方でした。東大寺の、今度、あのー、大仏殿をね、補修するそうですよ。なおすんだって。そうすれば、あれがまた見られなくなるから、その前に一回行こうと思いましてね。行って来たんですよ。

エートね、ウーン、ちょうどね、あれが、また、あの、ぼくが行く、その日がね。……僧正の、あの、唐から来た、唐渡りのぼうさんですが、その方の、千二百年の、ちょうど、その記念日だったんですね。いいところへ行きましてねー、すごいものでしたよ。普段ね、あの墨染めの、あの衣きて、こう……すごいんだ。もう、なんていうんだか、もう、あきれるくらいきれいな着物きてね、いるんだ。本当に、あきれたもんだ、もうー、ほんとに、おどろきました。もう、千二百年も見てきた、フンフン、わけでも、ないけれど、良かった。立派でねー。きれいでした。こういう夜は、こうこう……こういうね（と黒板に絵をかく）あー、いいんだ。それが麻、麻ですよね。白い麻で、白いね、薄い麻で、もう一回白いの、こう、上に着てるんだ。ここだけが、白くみえるんだ。これがなんともね。金欄どんすのね、いや、金欄どんすじゃない、きんらんの、あの、衣を着た人もいましたけど、こういう人、二、三人いました。とっても、いいんだ。

ボクがね、奈良にね、去年いた、桜井っていう町、ありましてね、町といっても、あそこ、市でしょ。そして、あそこに、万葉百人っていうね、あの、（黒板にかく）万葉百人の詩、詩をね、書いたんだ。小さいんだ。こんなのあるね、貝の、こんなのある。それで、あの、万葉うたった天皇から、そのほかの人々、大勢のを、百人の人のうたを、ですね、現代の、人たちに書かせて、それを、やまのべの道ってね、ご存知でしょ、そのやまのべの道に、ずっと、こう、立てました。私のもねー、あるんだ。

それで、あの、あそこは、なんだっけ、あらし川っていう川あるの。（と黒板にかく）あらし川っていう川あってね、そこが、ちょうど、あらし川なんとかかんとかっていう、なんとかかんとかってことないでしょ、家持（やかもち）だから、家持じゃない、人、人麻呂（ひとまろ）だから、ね。人麻呂のうたなんですよ。そ

れをね、あの、ほった、ぼくの字でほったのね、ありました。ちょうどいい時で、今ね、柿がとてもよく色づいていました、柿がね。それから、みかんもなっていました。ちょうど、その碑のね、そば、うん、そのあらし川っていう、今もやっぱりあるいてる、んじゃないな、流れてるのよ。うんうん、その川がね、水が流れてるのよ。とても、きれいな、音して、きれいな流れ、きれい。実に良かったですね。見えるようだなあ。川が流れているな。きれいな水ですよね。ちょうどその辺。

今、奈良の、その東大寺、と、あらし川のその碑を見て、それから……そこを、この、歩いて、それで、帰りましたけどね。

そのー、話が返るけどね、今の海雲がね、どうも人のことを呼び捨てにする悪い癖ですな、上司海雲先生です。それで、それで、ぼくは、棟方だって、棟方っていったって（笑い）ムっていったって、棟っていったって、何も怒りませんよ。ぼくは、余り、さんとかなんとか言われるの、がらに合わないもんな。だって、今、皆さんだって、まあ、一番偉人をさして、まあ、神武天皇さんなんていわないでしょ。神武天皇っていうでしょう。楠木正成様なんていわないでしょ。楠木正成、なんてね。ウン、明智光秀とか、いうでしょ。それと同じ、さんっていわれるの、まだ、偉くないんですよ。（笑い）さん、つけられなくなるように、ならなければ、ダメ、人は。ウン。梅原竜三郎って言われないと、梅原は、偉そうに見られないね。梅原さん、なんていったって、（笑い）、鉄斎さんなんてね。志功、っていえばね、何だか、偉そうに、偉くなくても、偉そうにきこえるよね。志功！　棟方！本人は偉くなくても、偉そうにきこえます。梅原！　っていった方がねー。

けれども、現在生きている人は、どうも、そういうと、あれは、呼びすてにした、なんてね、いうよ。うそつきだなあ。生きてるのは、きちがいだ、みんな、ウン。生きてる人本当にけちくさい話で、おもしろい話、あるねえ。ウフフ、本当よ。

あの、そうだ、けちくさい話、しよう。これも、前に、話しましたが、まあ、いいよね。この際、話しとったって、いいよ、どうせ、ね。そのー、物のわかんないのが、しゃべるんだから。ね、うん。

東大寺、の、あのー、は、毘盧遮那仏ですね。真言宗のシンボルは。毘盧遮那仏、るしゃな仏っていうのかなあ。書けないね。（と黒板に書こうとする）確かねー、辞書にもありますよ。びるしゃな仏ね。

この、るしゃな仏をね、昔から、毎月一回、掃除するそうです。あの、和尚さん方が、はちまきをしてね、うん、そしてもう、手のひらに上がったりね、どっか、あのー、まぶたへ、こう、上ったりしてね、こう、ほうきで、こう、ごみをとるんですよね。

たまたま、鼻の穴を、こうやったんだって、それも、ほうきでね、こう。鼻の穴、直径三十センチなんぼなんていうんですから、すごいよねえ。ほんとにすごい。「おい、なんでおれを、こういうふうに、この、ほうきなんかで払うんだ。毎年……」「ごみがついて、むさ苦しくなっているから、それを払わなければならないので、一年に一回十二月何日って、決まっているのですよ。ですから、わるく思わないで下さい」うん、っていったら、「そうじ？　ハー、お前たち、そうじ、そうじっていったって、ぼくの、その体だけを仏だと思っているのか。この、ちり、このたまっているちり、も、仏陀だ」って、言ったそうですよ。ちりも仏っていうんです、それをね。（黒板にかく）、ただ、この、体にできた大仏だけをね、仏だと思って、おがんで、お経をあげて、ありがたがる、かたじけながる。それじゃ、本当の宗教をしらないということを、大仏が、そのぼうずに言ったらしいんですね。「この、何、億の、何千、億の、このゴミ、これをね、仏と、見るのが、あなた方の商売じゃないか。素人の場合は仕方ない。けれども、あなた方は、これで飯くっているんじゃないか。それが、この、ちりを仏とみえないっていうことは、なんーという、ふとどきなヤツか」っていうことを、仏はね、教えたそうですよ。

ちりも仏、を、しらないで、仏を念ずる、っていうバカ、ほどね、無法だって、いうことですよね。法がない。法がないっていうことですね。ゴミをね、ちりを、一つのチリを一つの仏、それを何万の仏にみる心が、あること、ね、有法なことなんですね。（黒板にかく）そのチリをね、仏に、みることこそ、本当の信心じゃないか、っていうことを、大仏が、教えたっていうことですね。

偉い偉い坊さんが、最も、大切な、ことを、ひとことで教えて下さいっていいましたら、「赤子の念ぶつ」が大切だっていったそうですよ。「赤子の念仏は良きなり」って、「赤子

の念仏は、いーよ」って言ったそうですよ。

その言葉は、やっぱり、勉強、から生まれた知識じゃ、ダメだっていうことですね。信心ができていない、っていうことですよ。赤ん坊のように、なにしても、わめいて、泣いて、もう、すべて、そういう自分の本当の信心をね、表現するのに、ないてわめいているところに、本当の宗教もあり、信心もあり、更に高くした点もありっていうことを言った、和尚さんが、ありましたね。

こういうこと、なんじゃないですか。なんでもかんでも。知識じゃない、世界こそ、現代の、この世の中に、最も大切な、世界、っていうこと、ですね。いや知識、ないっていうことは否定していませんけどねー、私も、そのことをきいて。それなら、バカがいいかっていえば、それはダメでしょう。やっぱりね、光るように、輝くように、あふれるように、世界をおおう、大きい大世界こそ、やはり、このー、本当のことなんですよ。

本当のことというのは、やっぱり、その知識を、一応ね、味わった、知った上での、赤ん坊になる、っていうことが大切、だっていうことを、言ったんじゃないでしょうか。いっくら、山ほど、海ほどある知識も、赤ん坊、赤ん坊の声のように、熱心に吐き出す世界こそ、そこに、しんみょうの……てつがあるっていうか、悟りっていう世界が……。

そういう大切さこそ、大事な世界だっていうことを、私は、今まで、こうしてしゃべっていながらですねー、そういうところへ、から、出発して、そういうところへ帰って、くる話が必然の、必然だっていうことを、覚えましたね。

いわゆる、一番、冒頭にしゃべったように、網走の刑務所、いったら、よーこそいらっしゃいました、また、帰る時、またドーゾおいで下さいって、いったと同じように、私、今まで、こうしてしゃべったことも、帰るときは、よういらっしゃいました。また帰る時には、またドーゾいらっしゃいっていうことばで、迎えてもらって、そういうことばで、帰っていきたいと思います。それは、ただ、人の、思い、や、世界だけでなく、あらゆる対面の、世界の中に、そういう大切なものが、ひそまれて、無尽蔵に、ある。そういうことすることは、やっぱり、物を感じて驚く、いうことですね。前にもふれた通り。

それから、何といっても、ぼくは、やっぱり驚くことと、

喜ぶことと、一番めんどうな悲しむこと、これがとっても、人間の三感のうちで、もっとも、大事なことは、悲しむことでしょう。

おどろくことと、よろこぶことは、こりゃなかなか、だれでもできますけれど、悲しむっていうことは、泣くっていうことは、なかなか、だいたい人でも、できがたいそうです。偉い、偉い、偉い、もう、人が、泣いちゃダメだっていうことを、最後にいって……の中に入ったっていいますね。人間は泣くもんじゃない。もう、あふれる涙が落ちるけれども、落ちないところで声出さない心で止まるっていうことの大切さ、大いに、どう、それを、きっていくかということの、心の思いをですね、我々大事にしていただきたいと思います。どうも。(拍子)

＊　＊　＊

――これから質問にはいる。

松村康平「先日、テレビで、化けるというお話を伺って、感動したのですが、そのことを、ここでも話して下さいませんか」

北斎の浪裏っていう、あの、絵があるんだー。あの、それで、この浪裏っていうのはねぇ、あの、こうなってこうなって、浪の裏でねぇ、ここは、こうなっているんだー。(浪の絵をかく)こういうのが、この浪の鉄砲がね、ほんとうにね、海の浪よりも、本当の浪なんだ。こっちの方がね、絵の方が、北斎の浪の方がね。この浪にはね、驚いたの。この浪が、浪を背負って、又、背負って、又、浪を背負っているの。本当に、不思議なくらい、この、えー、本当の浪でしたね。そして、その浪ー、北斎の浪は、本当の浪なんだ。本当の浪なんだ。こっちの方が。

こういうことでないと、ぼくはね、絵っていうもんじゃないと思うの。ただね、こうー、ここにかいていたってね、絵じゃないですよ。

よく、あの、美術学校へ行くと、デッサンデッサンいうけどね、デッサンっていうのは、デかいて、ツかいて、サかいて、ンなんだよ。それだけよ、うん、ねぇー。ほんとにね、この、なんだ、デッサンっていうものは、本当の人間のね、体の皮とか、肉とか、そして、骨までね、見なくちゃ、とどかなくてはね、デッサンじゃないですよ。デッサン、デッサンなんていっている人は、……なんだ。ぼく、だから、こな

いだ、言ったの。

あの、北斎をね、奇人だっていうんですよ。奇な人ですな。黄色じゃないのよ。（と黒板にかく。笑い）どの位奇人かな、ぼくなんか。あまり大きくないんだ。奇人っていう人が、よっぽど奇人で、えー、北斎とかぼくなんか、とても、まともですよ、フフン、ほーんとに、まともだ、あーあ。それは、なぜかっていったらね、その、自然を相手にしてないから、奇人のようにみえるんですよ。いや、そんなこと、本当、大きなこといって悪いですけど。筆もつからね、そうなるの、ぼくは。今日、チョークだから、そうならないけど、これが筆だったら、筆を、こうもったね、もう、ぼくは、ぼくじゃないの。奇人じゃないの、まともですよ。あーあ、本当に。だから、奇人なんて、筆もてば奇人なんていうの、大バカですよ、大まちがいですよね、あーん。ひねくれたもんだ、その人は。こっちは、素直なんだから。もう、まるで素直で、大変なんだ。（笑い）

それがね、化ければ、大変なことになるんですよ。それが、私がよくいう、化けるっていうことですよ。

さっき、来る車の中で、ぼくの油絵がいいって、ほめてくれましたよ。ぼくは、うれしかったんだー。うん、とても、うれしかったんだ。ぼくの油絵をいいってね、ほめてくれる人がある、っていうことね。ぼくの油絵、二度筆使わないんだ。ヨーロッパから伝達された技法っていうのは、二度筆、三度筆、四度筆、五度筆、筆がいっぱい、いっぱい、いっぱいつくんだ。けども、私ー、の、油絵っていうのは、二度筆ないんですから。本当にね、これだ、と信じたものを、化けさせたいから、ぼく、二度筆、使わないんですよ。二度筆使うと化けがなくなってしまう、化け、たじゃなくて、あの、もう……になってしまうからね、二度筆使わないですね。その、ゴッホなども、その、あのヴァン・ゴッホね、あの人も、二度筆ないですよ。ヴァン・ゴッホの、みてますとね、木の遠近がね、遠いところと近いところが、見ている遠いところと近いところよりも、更に空間をね、通した、そのー、いわゆるこの、人間の感情を、大きくこのアレンジさせてね、化け物のような世界がね、あの絵を作っているんですよ。

まあ、あの、ベートーヴェンっていう作曲家、ねえ、ぼくよりも、まずい顔だけどね。（笑い）ぼくも、よっぽどまずいけど、あの人もっとまずいよね。（笑い）

あの人の曲が、一から九まであります、シンフォニーが

ね。ぼく、好きなんだ。（と第九のハミングをする）そこまで。（笑い）それほど、いいんだ。あれだってね、やっぱり化けているんですよ。ただ、曲をね、こう、書くとかなんとかって言うもんじゃないんですよ。もう、あのね、曲をね、もう一歩ね、上ずったもんですよ。上ずったっていうことは、ベートーヴェンの、生命をね、もっとからからしたものから、あの、独唱曲ができていますね。あそこだけは、やっぱり何十年、何十年じゃない、何百年たっても、ベートーヴェンの曲じゃないですか。いや、クラッシックだって、バカにしたもんもあるでしょうよ。

やっぱり、その人だって、やっぱり、カラヤンの指揮でね、こうね、こうー、やってね、こうやるのいいじゃないですか。ね、ああ。あの、イタリーのテノールと、それから、あのイタリーのアルト、じゃない、あの、あの、なんだ、そら、ソプラノと、アルトと、ねえ、バリトンとバスと、いいじゃないですか。大きくなって、広くなって、次々、次々と大きくなるんじゃないですか、ねえ。こうね、こうね。（と黒板にかく）これが主題を作るんだ、これ、音楽の、化けものというものがあると思う、私は。そういうことに、ぼくは、ものは化けないとダメだっていうこと、いいますねー。

私はね、あのー、美術学校で、今、よく、あの、教えてると、いいますよ。一番下手なのは、美術学校の先生だっていうことを、よくいいます。（笑い）うん、けれども、それが一番上手なんだ。一番上手だから、一番ダメなんですよ、それがね。で、まして、絵かきで、立派な絵かきさんっていうのは、みんなヘタですよ。梅原だって、梅原さんじゃない、梅原！　（笑い）だってね、鉄斎だって、ねえ、鎌倉の絵巻きをかいた人だって、桃山の屏風をかいた人だって、ヘタクソ、うそばかりかいてるよ。うそ、うそばっち。うん。木のてっぺんに葉がついたりね、楠の木に花の枝をつけたり。あれはなぜかっていえば、上手な技法っていうよりも、真実な、それも、さっきの、浪じゃないけれども、松なら松のね、木よりも、更に化けさした、真実を表現、しようと思うには、どーしても、ある技法をとらなけりゃならないところにね、上手なそのやり方のその人には、できないんですよ。

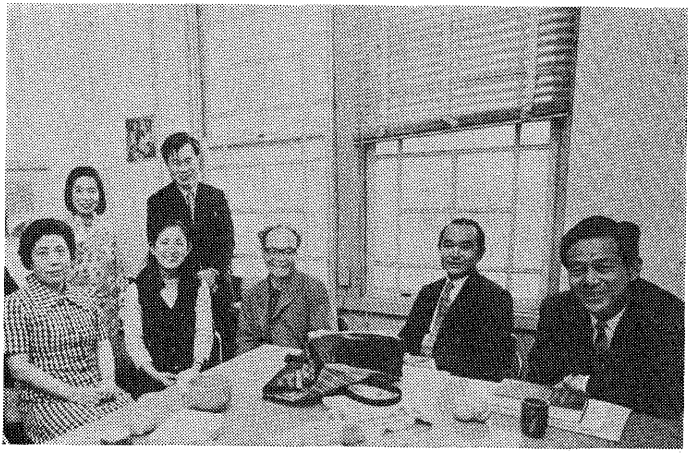
ぼくが化けてかくから、化けているだけのことをそこに表現するから、その買う人が、化け代を払うって、いう、ことでしょう、きっと。だからぼくは、化けるっていうことは、非常に大切だし、上手っていうよりも、下手だっていうことはねぇー、立派だっていうことですよ。上手っていうこと

は、それ以上に何にもないもん。上手だっていうことは、立派になるっていうことですよ。立派なのといいのと違うのですよ。いいとか、おもしろいとかっていうこと、よくいいます。

おもしろいなんていうことよくいいます、が、や、おもろさっていう、あらおもしろい、あらたのしい、って、……だと思います。面が白いんだからね。（笑い）あの、字引き、また字引き出すけど、字引きを引いて、おもしろいっていうの、あらおもしろい、あの、あらおもしろい、たのしい、あんなさえきって。冴えきるっていうことも、いいことばだね。

冴えきるっていったけど、あれは、やっぱりね、おもしろいとかいうことばより、よりももっとね、大きい、ちがい。それは、やっぱり、事をね、おもしろさを、一回化けるっていうところに、その一、立派っていう字があるんですよね。初めは立つっていうんだ、これもね。立派っていう字は、初め立つっていうんだ！。これは、また、たいしたことばでしょ。また、いずれの機会でね。あの、今の、六時から始まっているけど、九ちゃんの、あの、里見八犬伝じゃないけども、いずれ、このあとで、ハハハ。（笑い）

講演がおわって談笑のひとときを



前列右より，田口恒夫，森田宗一，棟方志功
後列右より，津守　真，本田和子の諸先生方